

ポーランド人コンラッドと 彼の「七つ島のフレイア」

秋 葉 敏 夫

ややもすると忘れがちだが、ジョウゼフ・コンラッド (1857～1924) は生粋のポーランド人である。彼の本名はユーゼフ・テオドル・コンラッド・ナーレチ・コジェニョーフスキー (Josef Teodor Konrad Nalecz Korzeniowski) という。このうち、ナーレチ・コジェニョーフスキーが姓名である。ジョウゼフ・コンラッドというのは、作家以後のペンネームにすぎない。作家以前の船乗り時代、彼が船乗り契約の署名などに書くのはもちろん本名だし、英国カンタベリー市郊外にある墓碑銘にも、その名前が使われている。実際、英国に定着し、作家としての名声を確立したあとも、コンラッドはたえず祖国ポーランドのことを考える。そして、1914年7月には、彼は一家を連れて、当時オーストリア領の母国を訪れた。それは彼自身およそ21年ぶりの里帰りである。3年後には、意外にもポーランドが独立して、彼は驚き、安堵する。彼は作品の中にポーランドを持ち込むことはほとんどないが、とくに晩年には、祖国に対する望郷の念が1段と強まったらしい。

およそ3,500を越える手紙のうち、コンラッドには、ポーランド語やフランス語を使ったものがかなりある。彼の母国語はポーランド語だし、フランス語に関していえば、当時の西洋事情と彼が東欧の上層地主階級の間人なので、それに堪能なのは自然な話だろう。ところで、それらの手紙を除くと、コンラッドは小説、回想記、エッセイ、芝居 (自分の小説の脚色) など、すべての作品を英語で発表した。そして現代の危機と

人間の運命を見つめながら、彼は文学への信頼をもとに、情熱や想像力や軌新さという特質を示す。彼が展開した、人間精神の暗黒面への探究、鋭い政治認識と権力構造への注視、小説技法のさまざまな試みなどは、この異邦人に、現代イギリス小説の先駆者の位置を与えている。コンラッドの場合、いわゆる作品の出来、不出来は激しいのだが、その評価はさぶる高いわけで、問題意識も、当時から80年～90年たって色あせ、死んでしまったというのではない。彼のすぐれた小説の主人公は、今でも、確実に「われらの1人」であろう。ただし、普通の英国人の作品と比較して、彼の小説には、やや異質な面があるのも否定できない。

この異質とはどういうものか。それが根強くあるとして、その理由はなにか。作家コンラッド理解の本質に触れる、こういう問いかけは、1筋縄では答えられないものを含む。しかし、その異質さ、その理由の1つに、少なくとも、ポーランド人コンラッドのすがたが浮かんできるのは事実だろう。彼の海の物語群は、女性の登場がほとんど見られないにせよ、海洋国イギリスでは、男性行動の簡明な表現として、それほど近づき難いものではないはずである。ところが、例えば人間心理のとらえ方やその追求、あるいは舞台が陸上^{おか}の政治世界になると、ものごとは少し違って来る。また、コンラッドの描くところに、余裕やユーモアは乏しいか、ほとんど皆無に近い。それというのも、個人の気質的な面を除けば、そこには、ポーランド人の思考様式や、小国ポーランドの悲惨な政治運命に端を発するだろう、暗い政治認識が、投げ込まれるからである。コンラッドが一般大衆になかなか人気を博さなかったのも、多くは、そんなところに起因すると推測される。おそらく彼のそのような小説に接した英語国民は、そのぎこちない、難解な英語は別として、時には、まるで翻訳小説を読んでいるように感じたのではないだろうか。

ものごとをコンラッドの政治世界に限ると、当時、大英帝国の名残りも濃いイギリスと、3国分割支配下のポーランドでは、その差はいかに

も大きい。前者の人間がややもすると支配者の立場から政治を見つめるのに対し、この作家は被害者の視点で政治をとらえる傾向が強い。結果的には、それで、政治のどろどろした実態に迫ることができたと思える。コンラッドにとって、政治とは1つの「破壊的要素」で、人間はそれに巻き込まれ、押しつぶされる存在にすぎない。政治の本質は弱肉強食であり、自己の利益である。個人は集団の犠牲となり、目的は行為を正当化する。政治における美辞麗句の建て前と陰険醜悪な本音とを、彼の眼はけっして見逃さない。しかも、政治の破壊性とか残虐さは、人間と政治とが不可分のものとして、歴史的観点からとらえられる。コンラッドの時流を抜く政治認識は、いわば、人間運命の予言に近づくのである。そして他方では、同時に、彼は政治への嫌悪や恐怖、権力への嫌悪や恐怖を深めていったと推測される。彼の作品に見られる政治への凝視には、まるで敵意で歪められたようなものも出る。

この小論で扱うコンラッドの「七つ島のフレイア」(‘Freya of the Seven Isles’, 1912) は、長さが中編に近いロマンスである。そこでは、現実的な側面として、政治の力、「力は正義なり」の主旨が不条理と恐怖の対象のように導入され、それを体現する権威筋の男の横恋慕が描かれる。この作品に占める政治の位置は、例えば、次の引用部分にまとめられるといってもよい。これは物語の冒頭部で、主人公フレイアの父親について説明されるところである。

しかし彼は、概して、例の「当局」というやつを恐れていた。……彼はスペイン人ほどオランダ人が怖くはなかったが、彼らをずっと信用していなかった。本当に、すごく信用してなかった。彼の意見によると、オランダ人は、不幸にして彼らのご機嫌を損ねる「者にどんな汚ないことをしでかす」かわからないのだ。オランダ人にもきちんと法律や規則があるが、彼らはそれを公正に適用しようなどとは考えな

い。おずおずした彼がどこかの役人と用意周到に接するところを見るのは、いかにも哀れを誘うのだった。それに、この男が以前、何事も恐れず平然と、ニューギニアの人食い人種の村まで出かけていったことがあるのを、思い出せばよいのだ。(しかも、彼は生まれてずっと肉付きがよく、もしこういっていいなら、ぱくりと1口食ってやりたい人間だった)そして、その時の仕事といっても、結局は50ポンドにも達しなかっただろう、なにか物々交換のためなのである。¹⁾

1910年1月、コンラッドは長編『西歐人の眼に』(*Under Western Eyes*, 1911)を脱稿する。これはペテルブルグとジュネーブが中心舞台の重苦しい政治小説で、その完成に、およそ2年ほどかかる。作家自身のことばによれば、²⁾ その大作の思い出は脱稿後の重病だということ、やはり彼は、その執筆に疲労困憊したらしい。彼の眼は、このあと気晴らし的に、20年ほど前のなつかしいインド洋に向く。こうして出来上る1つが、この「七つ島のフレイア」で、約26,000語の作品は、ちょうど2か月ぐらいで完成している。比較的遅筆のコンラッドにしては、それはかなりの執筆速度だが、この気分転換のために取り掛かった恋物語にも、いわゆる政治の影が色濃く立ち込めるのは、注目に値する。そして、この作品にも、彼の他の場合と同じように、執筆のためのちょっとしたヒントがあったらしい。彼はエドワード・ガーネットあての手紙で、そのことについて説明する。

……この物語は、私がシンガポールにいたとき、建造後5年もたっていないコスタ・リカ号に関するものです。男の名前はサットンでした。……彼はある女性と結婚するために帰国し(その女性のことを、それこそ誰にでも話していたものです)、彼女をあちらに連れ出そうとしていた矢先でした。ところが、彼の帆船は、彼がなにか怒らせてしまっ

たオランダ砲艦の艦長のために、座礁させられたのです。彼はこのあと、マカッサルの浜辺を数か月うろつき、そこのとりでに埋葬されています。³⁾

この出来事は、そのまま、作品「七つ島のフレイア」の現実世界の骨格をなす。説明に見られる「ある女性」は題名の主人公となるが、彼女は20年以上も前に、モーリシャス島で、作家自身の心をとらえた女性に拠っているらしい。ただし、そんなことは作品理解にはどうでもよいことで、問題は、若者たちの恐れを知らぬ恋物語が前面に出ていることである。彼らはいわゆるロマンスの男女に仕立て上げられ、恋に酔いしれる成熟以前の人間にすぎない。なにか不幸な事件が起ると、彼らは現実対処ができないし、また、その努力をしない。彼らの恋物語を読解すれば、例えばウィリアム・W・ボニーの書くように、「この物語は、愛の力を知るための恋の資格と、さらに恋の放棄を直接扱っている」⁴⁾ということはどうもなすける。関連するのは、愛の支配力、独占力の追求である。ところが、愛の主題を展開するのに、その破滅のすがたを見つめることは、同時に、破滅の原因を強調することにもなる。この作品では、俗受けを狙う恋物語は、豊かに肉付けされた作家の創造に近い。そして、それで政治がからんだヒントの現実面をきわ立たせるのは、いかにもコンラッドらしい、興味深い工夫だろう。

物語^{ストーリー}を少したどると、デンマークの元貿易商ネルソンに、「群島の貴婦人」と呼べそうな、年頃の1人娘フレイアがいる。彼女はイギリス人の交易商で帆船ポニト号の持主、ジャスパーと恋仲である。ネルソンの住む島はオランダ当局支配下であり、彼は当局から睨まれているらしい。ジャスパーの訪問を快く思っていない。彼の現在の心遣いは、何はともあれ、当局の機嫌を損ねないことなのである。フレイアは父親から結婚承諾を得られそうもないので、21才の誕生日のあと、帆船ポニト号に乗

り込んでの駆け落ちを考えている。実際、フレイアもジャスパーも、かなり楽観的に未来の幸せを確信する若者である。ただ、醒めたところがあるとするれば、フレイアが、自分の愛の力を試すかのように、恋人の無鉄砲さを注意するぐらいにすぎない。作家の筆は、2人の恋心を、とくにジャスパーの浮き浮きした思いを強調する。重要なのは、この若者にとって、美しく艤装された帆船ポニト号が、いわばフレイアの魂の化身であり、情熱の源泉と恋の成就を意味していることである。作品からことばを借りると、その帆船は、「広い地球上で2人が生きてゆくための唯一の足場、彼の情熱の保証、冒険の伴侶」⁵⁾ということになる。

ところが、七つ島周辺を見回る、オランダ砲艦の艦長ヘイムスカークが、このフレイアを恋してしまう。彼は40才の普通の海軍大尉で、特別の縁故や才能もなければ、なにか功績の目立つ人間でもない。巡回の途中、彼はネルソンの家を訪れるようになるが、フレイアからは好かれなない。そして、父親ネルソンも大尉の恋心に気付いており、当局の役人に対する、その不安な気持は大きく揺れる。ある日、強引に言い寄るヘイムスカークはフレイアからはねつけられ、さらには、恋人ジャスパーへの彼女の激しい思いを見せつけられる。彼は屈辱と嫉妬と憎悪のうちに、ほうほうの態で、屋敷を退散せざるを得ない。

ヘイムスカークは、フレイアがジャスパーのような下層の貿易商と恋仲なのに驚く。また、自分自身も平凡な大尉なのに、権力と地位で人間の愛を手に入れることができると考える。彼は恋の誕生に理由など見出せないのを知らないし、いわゆる「力の論理」で、人間の感情の世界まで入り込むのである。彼の恋が実を結ばない横恋慕にすぎないのはこのためだが、そこで、作家コンラッドが恋の誕生や性質について述べるのではない。彼が示すのは、物語の後半における大尉の復讐にはあくまで深い動機が存在し、そしてその手段が、作家の注視する「力の論理」によるものだという事である。最初の引用に見られる、オランダ当局へ

のネルソンの懸念は物語後半へのたくみな伏線になっていて、その支配下では、力ある者は正しく、なんでも可能なのである。そして、ヘイムスカークの復讐に即していえば、公的権力を持つ者の、その理不尽な私的使用も、少しの非難やとがめを受けることなく、容易に正当化されてしまう。

作品「七つ島のフレイア」は短編としてはかなり長いが、扱われる主な時間経過は数か月にすぎない。登場人物は複雑な性格だったり成長するというのではなく、ほとんど^{タイプ}典型とみなせる者ばかりである。そのうち、やや例外なのはフレイアで、彼女は最後に、自分の^{うねり}自惚れ、強情、気まぐれなどを反省する。他の人物たち、ジャスパー、ネルソン、ヘイムスカークたちの性格は、ほんの数語で要約できる。フレイアにとって、周囲の男たちはばかげて見え、「ジャスパーの性急さ、父親の恐れ、ヘイムスカークののぼせ具合」⁶⁾は不安の種だった。それに、ヘイムスカークは、気味の悪い人物と映っている。実際、こういう登場人物ばかりだと、作品はいきおい物語の進展だけをたどる、奥行きのないものになりがちだろう。作品「七つ島のフレイア」の特徴も、いわば、そのことで遂きていて、とくに後半の物語では、読者の興味を失わないよう、ヘイムスカークの復讐とその後の経過が次々に語られる。

オランダ砲艦の艦長ヘイムスカークは、悪人の典型として提出される。彼の描写には、「悪」を象徴する色彩の「黒」が多く使われ、彼は黒い髪、黒い目の持主で、黒いごきぶりになぞらえられる。また、彼の指揮する砲艦では、帆柱は黒いし、煙突も黒い。ヘイムスカークは、今や、フレイアへの恋をあきらめ、復讐として、攻撃的をジャスパーに向ける。大尉は通常の巡回勤務を1時中止し、それでも公的権力を私用に使って、ジャスパーの帆船を追いかける。彼は密貿易の嫌疑をかけてジャスパーを捕え、帆船ボニト号を近くの港に曳航する。ところが、その途中、目的港に近いところで、彼はボニト号を故意に暗礁へ乗り上げ

させる。ヘイムスカークの復讐はこれで終るが、座礁した帆船ボニト号は、まさに、ジャスパーの情熱の挫折、彼とフレイアの恋の破局を意味するものとなる。ジャスパーは意気消沈して、それ以後、なんら活発な行動ができない。一方、その経緯を知ったフレイアも、貧血症に悩む身で、現実的な対処をするわけではなく、失意のうちに、肺炎にかかって死んでしまう。

帆船ボニト号の座礁のあと、フレイアとジャスパーがなにもできないことに関連し、ジョスリン・ベインズは、「それというのも、2人とも現実的な人物ではなく、ロマンスの主人公なのだから」⁷⁾という。このことばは穏当なもので、作品「七つ島のフレイア」の骨組は、現実と対決したロマンスの悲劇に違いない。フレイアもジャスパーも情熱には強いが、理性の点では、まったく成熟以前の人間にすぎない。2人とも、ヘイムスカークの体現するものを、すんでの時まで予測できないのである。しかし、彼らはヘイムスカークの陰険さに敗れる甘い恋人でよく、この大尉の復讐に呼応するだろう、終結部のわびしさは、ものごとの現実面に再び眼を向けさせる。ただ、この短編では、ヘイムスカークのような政治的人間とどのように接してゆけばよいか、といった問題は、ほとんど扱われていない。

ところで、ヘイムスカークによる帆船ボニト号の拿捕と無関係ではない、エピソードが1つある。そのヒントは展開部の初めに与えられていて、ボニト号には、評判の悪いシュルツを船乗りとして乗り組ませている。彼はなかなか立派な船乗りだが、酒を飲むと気前がよくなり、金になるものはなんでも盗み出す、困った癖の持主である。ジャスパーが彼を雇うのは、他に適当な人物がいなかったのと、彼の奇癖を矯正しようという善意からだった。しかし、ヘイムスカークが密貿易の嫌疑をかけ、ボニト号を捜索したとき、防備のために携行を許されているライフル銃が見つからない。18丁のライフル銃は、ジャスパーの知らないうちに、

シュルツが売っていたのである。彼は捜索にあたった掌砲長に真相を告白し、証拠の銀貨を見せ、そのことはヘイムスカークにも伝えられるが、無視される。また、帆船ボント号が座礁させられたあと、この船乗りは自分の話が真実だと他の人びとに主張しても、だれにも信じてもらえない。相談を持ちかけた人びとからは、その話はジャスパーにはなんの役にも立たないだろうと、説得される仕末である。そして、作家コンラッドは彼らに、「なぜなら、イギリス人の商人をいったん捕まえたら、オランダのどんな法廷がそのような説明を受け入れるでしょうか。それに、実際、どのように、いつ、どこで、そのような話の証拠が見つかるのを期待できるでしょうか」⁸⁾と補足させている。法廷というのは、元来、綿密な調査と正確な証拠によって、公正な裁きをくださるべきところだろう。だが、彼らのことばは、法廷の場でも、ものごとが形骸化し、その機能が公正に働かないことを知る人びとの、諦めに近い思いを物語る。そして、彼らの思いは、権力筋の横暴とかずさんさを指摘していて、こういう描出も、政治の欺まんや非人間性に疑いを抱く、ポーランド人コンラッドの眼の鋭さに違いない。シュルツは罪の意識にかられ、そのあと、すぐに自殺する。

作家コンラッドが、オランダに対して、個人的な嫌悪や恐怖を抱いていたとは考えられない。そのことは、例えば彼の祖国ポーランドの独立をさまたげ、分割支配に組したロシア、プロシヤ、オーストリアの場合と異なるはずである。しかし、権威を笠に著して個人を圧殺するのは政治的専制と同質に近く、そういう動きには、どの国民であれ、彼の攻撃対象になったと推測される。実際、コンラッドが普通に描くオランダ人たち、例えば処女作『オールメイヤーの阿房宮』(*Almayer's Folly*, 1895) や、次の作品『島の流れ者』(*An Outcast of the Island*, 1896) の主人公は、異国の東洋を舞台に、怠惰と自惚^{うぬぼ}れから破滅してゆく人間である。彼らは立派な文明人だが、自然に囲まれた東洋の社会で、その人間的弱

さ、無能力ぶりを暴露する。それで、同じ東洋を舞台に活躍するヘイムスカークを彼らの仲間に見ると、この下劣な下士官も文明人の実体を表して、それもすこぶる政治的側面からとらえられたと考えることができる。

作品「七つ島のフレイア」は、全知の立場ですすめられる部分もあるが、形式的には語り手によって物語られる。この語り手は登場人物とかなり交渉を持つものの、その行動に影響を及ぼすほどではない。彼の主な役割は、物語に対する読者の親近感や信頼感を喚起し、同時に、作家自身の説明や注釈を自然なものにすることである。この短編では、そういう説明や注釈は少ないけれど、語り手の「私」は、例えばシュルツのエピソードに関連して、次のように述べる。「運命の皮肉は、私たちの人生に見出せると断言する者もいるが、露骨で残忍な戯れのすがたをとる場合がある」⁹⁾と。この注釈は、確かに、シュルツの悲劇に当てはまり、そしてジャスパーの悲劇、さらにはフレイアの悲劇に当てはまる。しかし、ものごとを「運命の皮肉」で片付けるのは粗雑だし、いかにも問題点を漠然とさせる。それに、物語の終結部におけるネルソンとの会見場面で、フレイアの死の原因が恋のためだと主張する、語り手の態度も、事実はその通りとしても、問題の本質を逸らしかねない。作家コンラッドは、この気晴らし的作品では、おそらく政治的側面をあまり表面に出したくない気持があったのかと推測される。

最後に、この作品の発表経過について触れたい。すでに述べた通り、「七つ島のフレイア」は1911年2月に完成した。だが、作品の雰囲気がかげうつで物悲しいと判断されて、1年以上も発表先が決まらなかった。実際、それは3種類の雑誌に断わられて初めて日の目を見るのである。そして、この作品は他の2編とともに、作家コンラッドの短編集『陸と海との間』(*Twixt Land and Sea*, 1912)に収録される。この短編集は、執筆時期が比較的近いものを集めただけで、作家の説明するように、¹⁰⁾

その共通項は舞台が漠然とインド洋海域だ、というぐらいにすぎない。それらの作品に、例えば主題の統一や主人公が同じといった、連鎖小説の意図は認められない。筆者は雑誌掲載の、最初の「七つ島のフレイア」は未見だが、それが短編集に収録されるとき、かなり内容の改変が行われたらしい。ロレンス・グレイヴァーによると、それらは次の5項目、「ネルソンの性格に関する言及、帆船ポニト号の叙述的描写、ヘイムスカークの心理分析、教養を示す隠喩（例えば、召使いの描写に『イタリア喜劇の忠実な小間使い^{カメリスタ}』と説明）、そして語り手の教訓的な意見」¹¹⁾に分類されるという。このことを考えれば、雑誌掲載の「七つ島のフレイア」は物語だけをたどった、いかにもお粗末な作品で、それは改変されて初めて、全体がやや複雑化したにせよ、コンラッドらしいものになったと推測できる。ただし、それでも、作品の質そのものが大きく変わるというのではない。比較的長い短編「七つ島のフレイア」の理解については、この作品は、ポーランド人コンラッドが気晴らし的に恋物語を展開しても、彼が根強く抱く、政治への嫌悪や恐怖から抜け切れなかったことを示すもの、ととらえるぐらいでよいだろうか。

Notes

テキストは Joseph Conrad: *Twixt Land and Sea* (Dent's Collected Edition) (1923; rpt. London: J. M. Dent and Sons, 1947) を用いた。後註における頁数はそれによる。

- 1) Joseph Conrad: *Twixt Land and Sea*, p. 148.
- 2) *Ibid.*, 'Author's Note', pp. vii-viii.
- 3) Edward Garnett (ed.): *Letters from Joseph Conrad* (1928; rpt. Indianapolis and New York: The Bobbs-Merrill Company, 1962),

p. 231.

- 4) William W. Bonney: *Thorns & Arabesques* (Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins University Press, 1980), p. 86.
- 5) Joseph Conrad: *Twixt Land and Sea*, p. 218
- 6) *Ibid.*, p. 187.
- 7) Jocelyn Baines: *Joseph Conrad, A Critical Biography* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1960), p. 377.
- 8) Joseph Conrad: *Twixt Land and Sea*, p. 231.
- 9) *Ibid.*, p. 231.
- 10) *Ibid.*, 'Author's Note', p. vii.
- 11) Lawrence Graver: *Conrad's Short Fiction* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1969), p. 165.